シリーズ〈訪問インタビュー〉

同・窓・生・N・O・W

聞き手＝永田浩三

みや なおこ 氏

高32期　女優

今回初めて俳優さんにお話を伺うことになった。大丈夫だろうか、ドキドキ。みやさんは、 劇団そとばこまちの看板女優として、生瀬勝久・山西惇とともに人気を博した。コント番組や「探偵ナイトスクープ」、NHKの朝の連続小説、数々のCM、シリアスな演劇まで幅広く活躍するみやさんに、住高時代や大学時代のお話から伺った。

永田　みやさんは何年のご卒業でしょうか。

みや　32期なので、1980年です。

永田　私より7期後輩ですね。住吉高校を選ばれたのは何か理由がありましたか。

みや　もともと本当は天王寺高校に行きたかったんです。そこを狙っていたんですが、中学校の卒業の答辞を読むことになっちゃって。

永田　中学校はどちらですか。

みや　新生野中学校です。答辞を書くのにものすごく時間を取られて、だんだん受験勉強ができなくなりました。国語の先生に毎日放課後残されて、受験勉強はもういいかという感じになりました。天王寺を狙っているのだったら住吉高校はラクラクみたいに言われ、それで住高にしたんですよ。

永田　直前に？

みや　結構直前に変えました。住高って結構そういう人が多いのではないですか。

永田　私も天王寺って言われてましたけど、僕らの頃は住吉の方が自由で、受験勉強をガツガツやらないで、楽しそうな学校と云われていたので、そっちの方が良いと思いました。

永田　クラブとかサークルに入っていましたか。

みや　一応演劇部に入ったんですよ。顧問は松葉芳先生でした。お芝居をしたかったというより、お芝居を観に行くというと、夜遊んでいても親から何も言われなかったので、夜遊びの口実に使うためでした。こんなこと言って良いのかなあ。松葉先生も趣味で別役実のお芝居をやっておられました。高校時代は遊ぶことがすごく楽しくって、ちょっと勉強そっちのけという感じで、いつも喫茶店へ行ってだべったりとか。住高には文化祭があったじゃないですか、そのお祭り騒ぎが劇団に入ったら、何かその延長というか本当にそんな感じでした。皆でワイワイ言いながら芝居道具を作って、打ち上げといって皆で飲みに行きました。

永田　体育祭のあと高校生なのに飲みに行ったりしましたか？

みや　行きましたよね。あるクラスが一度新聞沙汰になっているんですが、その時のクラス担任が体育の吉田先生で、一クラス全部が南（ミナミ）で捕まって西成警察署の柔道場に正座させられたと聞きました。皆いろんなところで飲み会をやっていたんですけど、文化祭か体育祭のあと一クラスだけ騒ぎすぎて、通報されたみたいで、確か新聞には住吉高校と出ていたと思います。でも誰も処分されませんでした。多分一クラス全部だから、全員処分したらえらいことになるからじゃないですか（笑）。電車道を越えたところに「幸」という喫茶店があったでしょう。お化けみたいなおばちゃんがママさんで、結構ラグビー部の人達のたまり場になっていた。そこのママさんいわく「住高はすごく自由で、喫茶店でたむろってても、校内暴力はなかったよね。違う学校では結構（校内暴力が）問題になっていたけど、住高には全くそんなものがなかったのは、こんなに自由にさせてくれても先生が何も言わへん。だから校内で爆発しないし、暴力も起こらないのね」。本当に先生がガス抜きを自由にさせてくれたおかげで、そうだろうなと思いましたね。

永田　住高では生徒を一人前扱いをしてくれましたよね。演劇部の顧問の松葉先生は僕の1年の時の担任だったんですよ。“君”付けではなく、“さん”付けで呼んで、一人前として、大人として扱ってくれて嬉しかったですね。大学は同志社大学ですよね。その時に「そとばこまち」に入られたのですか。

みや　大学に入る時は真面目に公認会計士か何かになろうと思って、経済学部に入ったのですが、経済学部は公認会計士になれる

学部じゃないんですよ。三日通って全然授業が面白くなくて、間違えちゃったと思いました。一浪して同志社に入ったのですが、本当は東京へ行きたかったので、もう1年大学に行きながら受験勉強してたんです。でもそれもダメだったので仕方なく大学に通っていましたが、「やっぱり私は道を誤ったわ」と思い、校門を出ようと思った時、劇団の新人募集のチラシをもらったんですよ。それが、たまたま稽古場が大学からの帰り道にあり、そういえば私、演劇をやっていたよなと思いだして。全然やりたいことは何もないし、学校も面白くなくてやめようと思っていたので、ちょっと行ってみようかなと劇団を受けたんです。

永田　それで無事合格。当時の代表・辰巳琢郎さんは京大の5回生か6回生でしたか?

みや　私が入団した年が辰巳さんの卒業年かな。1年くらい過ぎた時に辰巳さんがいきなり東京へ行くと言い出して。「NHKの朝の連続ドラマのオーディションに合格したので、座長やめる!」といったので「ハァっー??」と驚くというか、衝撃でした。座長を上海太郎に譲って行きはったんですけど。その年は英語の単位が一個足りなかったとかで辰巳さんは卒業できなかったんですよ。その後卒業されましたけど。

永田　その時の同期生が、私と一緒にNHKにいた有吉伸人さんですよね。有吉さんはいまNHKスペシャルの編集長をやっていますが、私がプロジェクトXの担当部長だったときには、彼は第一線のディレクターでした。

みや　有吉さんは同期です。

永田　有吉さんはみやさんのことをよく覚えていて、大学の劇団なのにプロ以上の公演回数を重ねて、みやさんは本当に一生懸命で真剣だったと。当時みやさんは、チャコットと呼ばれていたそうですね。

みや　そうです。チャコットです。劇団に入って初めてのお稽古の日に稽古場の片隅にバレー用品（メーカー）チャコットのトウシューズを履いた女の子の絵が紙袋に描かれてあったんですよ。それが私にそっくりだったので、辰巳さんとかみんなが「そっくり!」「そっくり!」、今日からお前をチャコットと呼ぶよと言われ、それでチャコットというアダナになったんですよ。劇団新感線のいのうえさんのようにもともと関西の劇団だった人はみんなチャコットと呼びます。

永田　有吉さんは、4年間で30回も公演したと言っていましたね。

みや　すごくやっていました。

永田　ほとんど毎月。

みや　月ごとに違う芝居を稽古場でやっていましたね。

永田　本当にうまくなっていった。

みや　本当にね。昔はいろんな芝居をやっていたんですよ。シェークスピアからつかこうへいさんの芝居から、ありとあらゆる分野の芝居を新劇から小劇場の芝居まですごくやっていたので、そこですごく鍛えられましたね。有吉さんもすごい演出をやっていました。それから後輩のNHKドラマ部で活躍する訓覇圭（くるべけい）さんも本を書いたり演出もやっていました。

永田　当時、辰巳さんが座長の「そとばこまち」が京都にありましたし、大阪には「劇団新感線」もあれば、「第三劇場」もある。古田新太さんとか、渡辺いっけいさんとか、生瀬勝久さんとか、関西の演劇はきら星のような時代だったのですね。

みや　ちょうど学生劇団が勢いをもって、東は「夢の遊眠社」の野田秀樹さんが出て、学生劇団ブームですよね。そこに乗っかって本当にメディアからもチヤホヤされ、今からという一番勢いのあった時代です。お客さんもどんどん増えてきましたし、本当に活気がありました。関西の劇団同士もすごく仲が良くてね。辰巳さんはプロデューサーとしてもすごい能力があるんですよ。巻き込んでゆく力がすごくある人で、関西の学生劇団を何とかしようということで、その当時第三劇場にマキノノゾミさんがおり、劇団新感線にいのうえひでのりさんがいて合同で公演をしようとするのにスポンサーを取ってきたりするのは辰巳さんがすごく上手なんですよ。それで合同公演をやってみんなで盛り上がっていこうみたいな感じで、だからあだ名は「社長」だったんですよ。みんな辰巳さんのことを「シャチョー!」と呼んでいます。

永田　演劇人として伸びてゆくために人間理解とか、世の中と自分との関係みたいなものを、知識というよりも自分の中で納得した何かを作っていくのはどんな風にやってこられましたか。

みや　やっぱり若い時はちょっと有名な劇団だったので、自分の鼻も高くなったし、今振り返ったら本当に小生意気というか、今あんな後輩がいたら殴ったるわ!みたいなことを自分は思うんです。後輩たちがお芝居を観に来てくれたりしたときに、いやな先輩だったでしょうと聞くと「そんなことないですよ!」と言ってくれるので少し安心しているのですけど。でも楽しい、楽しいと言ってた時から、だんだんギャラを頂くお仕事になってゆき、特に劇団をやめてからどうしても自分の思い通りにならないことが出てきます。男優というと年をとっていけばいく程、需要が増えてくるんですよね。でも女優は“若くてなんぼ”みたいな感じもあるので、ある所までいったら、ちょっと頭打ちするといったら変ですがそういう気持ちになります。その時に自分は専門の学校に行ったわけでもないですし、演劇の基礎から学んでないということにすごくコンプレックスを感じたんですよね。そうなった時に自分で何とかしなくちゃいけないと思って、発声を学びに行ったり、本を読んだりして勉強しました。今は本当に沢山ワークショップがありますけど、私たちの時はワークショップみたいなものは全くなかったんですよね。たまたま呼んで頂いた演出家がフランスにずっと行っていらしてルコック・システムを持って帰られた先生だったり、今、近畿大学の演劇学をやっておられる先生とかに可愛がって頂いて、海外から著名な人が来られた時にはわざわざ呼んで頂いて勉強させていただいています。「そとばこまち」時代の他の人に比べたら、そういう学ぶ機会を沢山いただきました。自分は皆より早く東京のいろんな人と一緒に芝居をしていました。東京の演劇人は大学を出てから、例えば文学座の養成所に入ったり、各演劇研究所に入って1年、2年勉強してそこから劇団員になれるか、なれないかという感じで皆遅いんですよ。だから25才で劇団員になれたらすごく出世みたいな感じなんです。私たちは学生劇団で4回生でやめますから、3回生の時点で主役を張れなかったらもう終わりです。21才位で主役を張っていないとずっと脇役人生です。ですから関西にいたらすごく焦るというか、早く上にいかないと、早く上にいかないとと思っていたんです。私が一番最初に東京で芝居をしたのが23才になる時、九十九一さんとの二人芝居だったのですが、皆にびっくりされたんですよ。その年齢で東京で舞台をやるのはまずいないといわれました。関西では4回生になったら引退というか、辞めていくのに、東京ではそうじゃないんだなとわかって。まだまだ学ぶことは一杯あると思ったし、いろんな方と知り合ったりして、そこからはじまりましたね。東京で劇団に入って、初めて観に行ったのがつかこうへい事務所の「蒲田行進曲」で解散公演だったんです。立ち見でしたが、すごく感動して「ワァすごく面白い!」と思って、二日続けて立ち見で観ました。その時に加藤健一さんとか根岸季衣さんが出演しておられて「すごく恰好良い!」と思いました。加藤さんが銀ちゃんをやっていて、私もこういう人と絶対一緒に舞台に立つと決めたんですね。劇団に入ってまだ一ヶ月や二ヶ月なのに私はこの人と絶対舞台に出る、舞台をやると決めて帰ってきました。「私、絶対加藤健一さんと芝居すんねん」と言うと、皆に「何言うてんねん」とすごく言われたんです。でも、27才の時に実現しましたから、言い続けたら夢が叶うんだなと思いました。

永田　根岸季衣さんとはどんな関わりでしたか。

みや　根岸さんとは「非戦を選ぶ演劇人の会」で、この10年位一緒に共演して今もすごく仲良しです。

永田　僕は「非戦を選ぶ演劇人の会」の舞台撮影の編集をしたことがありますよ。

みや　あれっ、どの舞台?私ほとんど出ていますよ。

永田　多分みやさんが舞台に立たれているのも編集していると思います。それが縁で根岸さんに僕がプロデュースした映画『60万回のトライ』のナレーションをしていただきました。

みや　そうですか。「九条を好きと言えなくて」とか、ここ何年か舞台に呼んでいただいて、根岸さんとはいっぱい仲良くしていただいています。

永田　テレビなどで活躍されるような俳優さんは、戦争反対とかは言いにくいような世の中じゃないですか。みやさんはそこを勇気をもって参加されていますが、なにか理由がありますか。

みや　自分が正しいと思ったことを言って何がダメなのと思いましたし、戦争は嫌だというのがあります。一時、演劇って何の役に立つんだろうと思った時があったんですね。もし何かが起こった時に一番最初に淘汰されるというか、無くてもいいものなんじゃないだろうかと思っていて「こんなのやってても意味ないわ」と舞台を休んだこともありました。そこで演劇の歴史とか演劇の持つ力とは何だろうと思って勉強したら、ものすごく力があるというのがわかったんです。例えば、会社でもコミュニケーション能力向上のためとかで演劇を使って訓練するじゃないですか。演劇は一応フィクションなので、もし何かあった時には「それは作り物ですよ」と言えるし、世間が口を閉ざすような本当は言いたいことが演劇に乗せたら言える。それフィクションだから本気で言ってないよともいえるじゃないですか。そこが演劇が別に持つ力だと思うんですよ。もちろん、それが転んだら、そちら側の力にもなるし、こちら側の力にもなります。でも、できれば表現者としては自分が正しいと思うものの方でいたいです。劇作家は私たちが思っていることをすごく真剣に考えています。今法律で表現を規制されると私たちは終わってしまいますから、そうやって声を上げていかないといけないと思います。逃げ道もありますが。ただマイノリティーだとは思いますね。

永田　僕もいろんな芝居を観せてもらいますが、役者さんて自分の体を舞台にさらし、自分の体ごとセリフを発する存在でしょう。それには自分がちゃんとそう思っていないと、ということがあると思うんですよ。例えば、戦争はいけないと舞台で話されることも心からそう思っている、その勇気と存在感はすごいと思うんですよ。

みや　そうですね。ただ全く反対の立場の役の時もあると思うし、やはりそこを自由に行き来できるという役者がすごいと思います。はたしてどこまで役者として思想というか、思いを持つのが良いのか、分からないというのが正直なところです。非戦の活動というのに関しては完全に自分のプライベートというのは変ですけど、自分が思うことをしようという感じでやっています。根岸さんって本当に熱いんですよ。だから私の中では根岸さんがやると言えば「やります！」みたいな感じ（笑）。本当に素敵で、熱い人なんで、大好きなんです。だから根岸さんに頼まれたらお茶くみでも何でも「分かりました。やります。やります。」という感じです。

今回、新作の演劇「檸檬の島」を拝見した。舞台は、淡路島の西側“七風村”。阪神淡路大震災直後玉ねぎ畑の斜面から、戦争の時捨てられた薬物缶が発見された。イメージ一新のために“七風レモン”というブランド果実として出荷されるようになる。
みやさんが演じるのは、健気に働く奈津子。レモン園を支えるおいの丈はそんな奈津子（なっちゃん）に愛情を抱く。しかし、二人は互いの思いを表に出すことをためらいながら歳月は流れた。
2015年の「日本の劇」戯曲賞最優秀賞を受賞した話題作。

永田　今回の舞台「檸檬の島」の中でみやさんは全体を束ねるという役をやっていらっしゃいます。紙を手帳として束ねる“とじひも”というか、それぞれセリフがバラバラになりかねないのをきちっとまとめ、ストーリーを展開してゆく存在としてみやさんが活躍され、一本筋が通っていくのは素晴らしかったですね。

みや　そのように見ていただけたら本当に嬉しいです。有難うございます。

永田　「おばちゃん」というセリフが出てくるんですが、経験を積まれて、見目麗しいだけじゃない存在として、役者さんである面白さというのはいつごろから、どんなふうに自覚されましたか。

みや　私は生瀬勝久や古田新太と一緒に深夜にコント番組をやっていまして、おばちゃんをやったり、ハナを垂らしたアホの子とか、それこそ生瀬さんと漫才とかをずっとやったりしていました。そのほか「週刊テレビ広辞苑」「現代用語の基礎体力」とか、結構コアな深夜番組や関西の「面白サンデー」という番組でコントをやっていて、子供からおばちゃん、おばあちゃんまでやるので全然違和感や抵抗がないんです。

永田　おばちゃん的キャラのゆえに自由になれるということがありますか。

みや　あります。今日の舞台でも客席に背を向けて、お尻を掻いたり、しゃべりながら足を掻いてみたり、そういうことができるのはすごく楽しいですね。

永田　細かいところですけど、今日の舞台でサンダルが脱げるところはもともとの演出だったのですか。

みや　稽古をしているときに脱げちゃって、それで面白いからそうしようとなったのです。でもその時その時の瞬発なので脱げる場所はまちまちなのですよ。毎日ちょっとずつ違っているので、そのたびに動きは違います。

永田　そこからいつも全体をちゃんと見ていらっしゃるのかなと思ったんですよ。一番座長的役割を果たしておられる。みやさんがそれぞれの人物を束ねる軸となっておられる。

みや　そのように見えたのならすごく嬉しいです。

永田　自分が舞台を作ってゆくという面白さというのはどんなふうなところから感じられるようになりましたか。

みや　役者ってすごくわがままだし、自己中心的だと思うんですね。台本を読む時でも自分のセリフだけ読んでいる人がすごく多いと思うんですけど、でも、演技って反応なんで、相手がどう返してくるかということによって全部変わってきます。本を読んでいて、私はこんな感じかなと思っていても稽古していくうちに、相手の芝居が変わったりとか、演出家がこうしてほしいということで、すごく変化して、いつの間にかこういう風になっているということが一杯あるんですよ。今回は私の役の女性（なっちゃん）は昔、甥と関係を持って、そういう噂もされていたので、だから今は女というのを殺して生きているのではないかと思ったんですよ。それでズボンを履いて、おばちゃんみたいな恰好をして、女を捨てて、二度とそんなことはさせないっていうふうな人と思ってはじめは稽古してたんですよ。でも途中で、これはズボンかな、スカートかなと聞いたら、「スカートです」って演出家に言われました。「えっ、スカートですか」と驚いたのですが、次からずっと長いスカートで稽古してたんですよ。のちに衣装合わせをしますといって、衣装さんが持ってきたのはすごく短いスカートで、「こんな短いのを履くの？えーっ！足を出すの」。「出します。女は捨てないでください。お尻が大切ですから。絵のモデルとしてポーズをとるところも、足をシューっと出してください。最高

にきれいなポーズをして、太腿も見せてください」と演出家に言われました。私の年で足を出していいのっていう気持ちでした。相手役の彼もその短いスカートでは彼女（なっちゃん）のこと好きになれないと言ってたんですけどね。でも上演したら、みんなからあれでいいって言われました。それが役者として見ていたら、わからないのですよ。自分だったらこうだろうと思いますが、演出家がそうじゃなくてこっちなんですという方向に皆が向かっていって、出来上がった時にトータルで考えてみたら、ああ演出家はこれを目指していたのかというのがわかって、そこがものすごく面白いですね。お芝居は生き物なんです。自分がイメージしていたものと違っていても、そうだったらこう変わってみようと思ったときに、きちっとはまる瞬間があって、すごく面白いです。ある日演出家が皆に派手目の緑の衣装を持ってきてくださいと言って、それで稽古してみたんです。「これ何？本当にこれでいいの？派手な緑なんかで気が狂ってない？」という思いだったのですが、舞台装置が出来上がって、絵画のような背景の前に立って、客席から見たときに、鮮やかな緑の衣装がピタッとはまっていて、演出家はこれをイメージしていたんだなあということがわかり驚きました。役者だけの目ではそこまで見られないのです。演出家ってすごいなあと今回もすごく思いました。

永田　今回の場合、お姉さんが震災で亡くなって、自分は生き残った、そういう複雑な人生を、みやさんが生きるということになりますよね。いろんな人の人生を生きるわけですが、その面白さってどこにあるのでしょうか。

みや　稽古に入る前に、どう生まれて、どんな親で、どんな子供時代で、どんな兄弟で、どんな友達がいて、子供のときはどんな性格で、どんな人と付き合って、どんな恋愛をしたとか全部書くのです。彼女のライフストーリーです。

永田　その人生があるから、こういうセリフが出てくる。

みや　例えば震災のとき、私（なっちゃん）はこの家にいたのかどうか、お姉さんが下敷きになった時、私はそばにいたのかどうかを話し合いました。私も考えました。震災のときになっちゃんは33歳で、実家にお金もあったし、神戸とかでふらふらしていたのではないか。甥っ子、姪っ子は可愛がってた。でも甥っ子とそういう関係になるとしたら、ずっと一緒にいてはなれないので、多分彼らが育っている間は、お義兄さんに家を譲って出ていた。そういうのを全部作るんです。だから役者というのは色んな人の人生をすごく考えるし、そこから得るものはいっぱいあって、面白いなあと思います。すごく仲の良い女優さんが非戦の活動をしていて、お芝居に出ろって言われたんですが、その役をしようと思ったら勉強しないといけないので、資料を読んだり、映画を観たり、興味やアンテナが立ってきます。その時に自分が今まで何も知らず、何も考えずに来たんだなあということに気付きました。一つの役をするために、自分の考え方や感じ方がどんどん変わってきたということが確かにありました。最初オスプレイなんて知らなかったんです。ちょうど沖縄にオスプレイが配備されるときに「非戦を選ぶ演劇人の会」でゴリさん（ガレージセール）と夫婦の役をやったんですが、その時にオスプレイって何？って聞いたら円城寺あや（俳優）に思いっきり怒られて。でも芝居をやることですごく学ぶことがいっぱいなんです。役者をやっていなかったら、こんなにいろんなことを学ばないし、色んな事を知らないです。本当に何も知らないです。

永田　こんな役者になっていきたいということはありますか。

みや　そうですね。いいのか悪いのかわからないんですけど、えっ出てました？あの役やってたんですか？っていうくらい化けられるような役者になりたいですね。みやなおこが出ていたではなくて。

永田　その気持ちちょっとわかる気がします。荻上直子という監督さんが「彼らが本気で編むときは」というLGBTをテーマにした映画を撮られたんです。俳優のりりィさんが亡くなる直前に出演した映画なんですが、それがりりぃさんに似ているけど、誰だっけみたいなそんな感じでした。存在としての役があって、演じている人が消えていく。

みや　そういうのが良いと思うんです。私は役者としていろんな役をやりたいし、どんな役でもやってみたい。この役はこの人というのがあると思いますが、そっちの方が役者としてはいいのかもしれませんが、一色じゃなくて、いろんな色というか、あれもそうだったのみたいな風でありたいです。昔はいやだったんですが。舞台を降りたら、あれ、いたの？みたいな。九十九一さんとの二人芝居の時、蛇にとりつかれる、ちょっと頭の弱いけど激しい女の役だったんですけど、おすぎさんがその芝居が大好きで観に来てくださった時「あんたさあ、舞台降りたらただの漫画ね」（笑）て言われたりとかして、その時は複雑な気持ちでしたが、今となってはそれはそれで良かったと。加藤健一事務所の「牡丹灯籠」ですごく色っぽい「お国」という役をやったとき、地方公演に行って、終わってからみんな食事をしていたら、演劇を観ていた人から「出てました？」って言われたりして。

永田　なりきっていたんですね。

みや　なりきっていたので、わからなかったようでした。よく色っぽい役をするのですが、このままずっと実生活もいけたら、わたしモテモテかもしれないけど。それはなかなか難しいですよね。（笑）

永田　今日は舞台を拝見したのですが、テレビでもご活躍で、NHKの朝ドラとか様々ご出演されているのですが、テレビと舞台の違いはありますか。

みや　テレビはスタートと言われた瞬間にパンと入らないといけません。お稽古もそんなにしませんし、瞬発力がすごく必要だなあと思います。舞台はお稽古を何度も重ねて、ライブですし、積み重ねがあって、必ず役に持っていけるのですが、テレビは突然そこにもっていかないといけないので、そういう難しさはあります。もちろんそれはそれですごく面白いなあという部分はありますが。

永田　みやさんが、演じるというのが面白いなあと最初に思ったのはいつごろですか。

みや　それは九十九一さんとの二人芝居ですね。

永田　その前、中学校とか、高校とかでも演劇をされていたわけですが、背中を押してもらう最初の経験というのは。

みや　それを考えたら、小学校の時には台本を書いていましたね。「若草物語」とかクラスの学芸会で本を書いて演出していましたね。中学校の時も文化祭でクラスで演劇をやるときもやってましたね。

永田　何が面白かったんでしょうね。

みや　幼稚園の初舞台が「赤ずきんちゃん」なんですよ。お花を摘むシーンがあるんですが、舞台においてある造花を袖から見ている自分を覚えているんですよ。

永田　登場の最初のセリフは「まあきれいなお花」。私はESS部で一年生の時に英語で「赤ずきんちゃん」をやりました。「What a Beautiful Flower is it！」

みや　赤ずきんちゃんをやられたんですか。他に女性はいなかったんですか。

永田　オオカミや狩人は女生徒がやって、男の私は赤ずきんちゃんをやるんです。

みや　（笑）似合いそうですよね。

永田　昔は可愛かったんですけどね…（笑）「赤ずきんちゃん」の時はどんな快感だったんですか。

みや　やっぱり拍手されて、上手上手と言われたのが快感だったんでしょうね。舞台に立つのは全然苦ではなくて、クラシックバレエとかやっていて、バレエの発表会とか大好きだったんですよ。舞台の上で観られて何かをするというのが好きだったんでしょうね。恥ずかしげもなく。

永田　幼稚園の時の快感から一本線の人生ですか。

みや　いや、途中からは私は公認会計士になってお金を稼ぐんだとか、会社員になってとか思っていましたけどね。辰巳琢郎のせいで道を誤りました。（笑）

永田　ご自身は幸せな人生だと思っておられますか。

みや　そうですね。この道を目指してもなれない人がたくさんいる中で、恵まれていたと思いますし、いろんな人に助けられてきました。役者として本当に幸せな道を歩ませてもらっていると思います。

永田　高校時代ですけども、みやさんが得たものはなんでしょうか。

みや　自由に発想していいんだ。好きなこと好きにして良いんだという、カチッとしたものに行かなくても、道はいっぱいあるんだということを学んだと思います。こんなんしたらあかんのちゃうかなあとか、後ろ指さされるんじゃないかとか、まったくなかったですね。ほんと、それこそパンプスを履いて、ハンドバッグをもって学校に行き、帰りそのまま南（ミナミ）に行って遊んでいましたからね。教科書全部ロッカーに放り込んで。みんなやってましたよ。

永田　先生の授業内外で言われた言葉で記憶にあるものってありますか。

みや　授業を抜けて校門を出ていこうとしたときに、塀越しに先生が「どこに行くんやっ」と怒鳴られた言葉が一番記憶にあります。（笑）「こら、どこにいくんや」それを一番覚えています。

永田　面白い学校でしたね。

みや　面白い学校でした。

永田　今後のご予定を教えてください。

みや　次は5月に「おもてなし」を上演します。2年前の初演の時に文化庁芸術祭の優秀賞を個人でいただいて、それを再演します。作・演出がわかぎゑふです。

永田　大変大きな賞ですね。

みや　文化庁の賞は歌舞伎とか、ちょっと格調の高い人達がとる賞といわれていたので、それが小劇場出身で、しかも新人賞以外は団体で取ることが多いのに、個人で取るというのはあまりないらしいです。それですごく小劇場の後輩達の励みになったようです。頑張っていい作品に出て、自分が役者として頑張れば、私のように賞をもらえるというか、見ている人は見てくれているんだとわかったと後輩達が喜んでくれて、それがすごく嬉しかったですね。それの再演です。大正時代の船場の話なんです。

永田　それでしたら是非観に行かせていただきます。うちの実家も船場なんです。今は見る影もありませんが。

みや　そうなんですか。本当に船場の話で船場言葉でやります。狂言の茂山逸平ちゃんも出演します。舞台で狂言をやってもらうんですよ。頑張ろうと思っています。

永田　大阪の奥の深さというのを演じられるんですね。

みや　すごく素敵な女性、男の人から見たらすごくいい女らしいんですけど、ちょっとからくりがあって、女の人から見たらムムッという感じで、感想も両極端に分かれました。男の人はああいい女やなあと思われるんですが、女の人から見ると、あれはああいう意味が隠れているのに男はアホやな（笑）みたいな感想もいただきました。

永田　二面性を持っているんですか。

みや　二面性ではないけど、計算しているわけでもなく、したたかでもなく、一生懸命生きている。誰かをだまそうとか、陥れようとか思っていず、一生懸命船場の中で妾さんとして生きていくそんなお話なんで、船場のいろんなしきたりも出てくるし、着物もいっぱい着るんです。前は秋だったんですが、今度は初夏なので、着物も全部変えるらしいです。早変わりとか結構大変なんです。舞台袖では大騒ぎしながら着替えて、舞台に出てはシュッとすまして「おこしやす」とか言ってます。（笑）

永田　ぜひ楽しみに観させていただきます。今日はありがとうございました。

打てば響くとはこういうことか。みやさんはこちらが質問を出すと、鮮やかにシュートを決めてくださる。あっという間に時間が過ぎた。最近、わたしは永井愛作の『ザ・空気』のモデルになった。忖度と翻弄されるプロデューサーの役だ。もうひとつ『白い花を隠す』という演劇にも私が出てくる。妙に演劇づいているのだ。演劇は、世の中や人生の本質を人々に気づかせるカナリアのような仕事だ。みやさんはその世界のトップランナーであり続けてこられた。すごいことだ。2年前に個人で芸術祭優秀賞を受賞された『おもてなし』の再演も楽しみだ。

みや なおこ ＜略歴＞

住高32期。同志社大学経済学部卒業。大学在学中に、劇団そとばこまちに入団（辰巳琢郎座長）。辰巳退団後、生瀬勝久と共に劇団の看板女優として「冬の絵空」「おまえを殺しちゃうかもしれない」など、50本以上のほとんどの舞台、外部プロデュース公演にも数多く出演。NHK朝の連続ドラマ「いちばん太鼓」で、主人公の初恋の相手「幼なじみ・松子」で本格的ドラマデビュー。「京都地検の女」「ピュアラブ」「アーバンポリス24(部長刑事)」「週刊テレビ広辞苑」「現代用語の基礎体力」「探偵ナイトスクープ」などのレギュラーをつとめる。舞台「おもてなし」(作・演出：わかぎゑふ)の演技で平成26年度文化庁芸術祭賞優秀賞を個人受賞。

http://miyanaoko.com

❖ ❖ ❖

平成26年度文化庁芸術祭優秀賞「おもてなし」再演

【作・演出】わかぎゑふ
【主　　演】みやなおこ
【東京公演】
　全労済ホール／スペース・ゼロ
　2017年5月12日(金)～14日(日)
【大阪公演】
　ＡＢＣホール
　2017年5月23日(火)～28日(日)

他、札幌、東海でも上演いたします。

＜インタビューアー＞紹介

永田浩三氏

1954（昭和29）年生まれ。住高25期。ESS在籍。東北大学卒業後、NHK入社。主に教養・ドキュメンタリー番組を制作。『クローズアップ現代』などの編責として、国谷裕子キャスターと菊地寛賞を受賞。現在、武蔵大学社会学部メディア社会学科教授。ジャーナリスト。日本ペンクラブ会員。著書『ベン・シャーンを追いかけて』『NHKと政治権力』『奄美の奇跡』『ヒロシマを伝える』ほか多数。現在、東アジアと日本の「版画運動」について執筆中。

自由に。快適に。
あなたらしい毎日を。

ユニ・チャーム株式会社